

「教員になる」という想いを全力で支援します



# 未来への挑戦

平成29年度 第6号

宮崎国際大学 学生教職支援センター通信 2018年1月12日発行



教育学部小幼コース3年生が臨んだ小学校教育実習の様子



幼保コース3年生が臨んだ 幼稚園教育実習の様子

## 1か月の教育実習、今年もがんばりました！

教育学部3年生が、平成29年11月6日から12月4日までの、1か月間にわたる小学校及び幼稚園における教育実習を終了しました。

小幼コースが宮崎市内を中心に小学校21校、幼保コースが幼稚園及び認定こども園9園で経験した教育実習は、学生一人一人が、これまでの大学生活の中で、最も真剣に取り組んだ学びの時間でした。実習最後の日は、男子学生も女子学生も感動の別れのシーンを体験し、児童や園児のことが心からいとおしく思われたと話していました。実習終了後、多くの学生が「必ず採用試験に合格して子どもたちの前に再び帰っていきます。」という決意を新たにしていました。

学生たちは、指導案作成や日誌の記録などに追われ、寝る時間もなかなか取れない厳しい1か月でしたが、大きな感動と収穫を得ることができた貴重な1か月でした。実習終了後には、ご指導いただいた実習先の校長先生や園長先生、担任の先生方に直筆でお礼の手紙を書き、感謝の気持ちを伝えました。



小学校教育実習



幼稚園教育実習



中学校教育実習

# 教育実習報告会も、大変盛り上がりました

教育実習が終わって1週間後、全員が教育実習報告書を書き、それを綴じた「実習報告会資料」を作成し、12月11日に小幼コースと幼保コースに分かれ、それぞれの会場で報告会が行われました。どちらの会場でも、3年生が教育実習の経験談を1、2年生に一生懸命報告し、それを下級生が熱心に聞いていました。

小幼コースでは、4つのブースを設けて3年生が6、7人ずつに分かれ、3年生の熱のこもった体験談に下級生が聞き耳を立てるといって、昨年と変わらぬ真剣な、熱気のみなざる報告会でした。下級生からの質問もたくさん出されていました。



小幼コースの実習報告会の様子

幼保コースは、2つのグループに分かれ、1・2年生が3年生を囲んだ温かな雰囲気が漂う中で、報告会が行われました。3年生の報告の後、質疑応答がなされ、特に今年2月に実習に臨む幼保コース2年生は心構えを持つことができたようです。



幼保コースの実習報告会の様子

どちらの会場でも、参加した1・2年生からとても貴重な話が聞けてよかったという感想が聞かれました。ここで、3年生の実習報告書から一部を紹介します。



## 小幼コース

|  |  |
|--|--|
| <p><b>実習が終了して強く心に残っていることは何か。(満足感、達成感などを含む)</b></p> | <p>実習が終わって満足感や達成感も感じてはいますが、一番感じているのは虚無感です。楽しかったことも大変だったこともたくさんありましたが、大学生になってからは一番充実した日々だったのではと思います。それがとたんに終わってしまって虚しい気持ちになってしまいました。実習が始まった時は早く終わってくれという気持ちに誰でもなりうると思いますが、終わってしまえば人生で1、2位を争うぐらい短い1か月だったと思います。</p> <p>先生という職業の大変さを、ほんの一部だが目にしたり経験したりすることができました。生半可な気持ちでは教師にはなれないし、続けられないと心から思います。また、学校では、こどもの安全を守るために多くの対策がとられていることを日々感じました。</p> <p>担当学級が低学年で、あまり自分から積極的に行くと児童が引いてしまうと思ったので、最初は適度な距離感で関わりを持つようにしたことはよかったです。控えめな子に対しては、返事が返ってこなくても毎日挨拶と一言声をかけることをし続けたので、日が経つにつれ児童から話しかけてくれるなど、関係が築けました。</p> <p>最も印象に残っているのは子供たちと学校で過ごしていたときの充実感です。毎日学校に行って、子どもたちと遊んだり、指導案を作ったりと、正直かなり忙しいとは思いますが。しかし、毎日が本当に楽しくて、それとは逆に休日は学校に行けないことの寂しさが募っていました。実習を終了したという達成感には確かにありますが、それよりも喪失感が大きいという結果になりました。</p>  |
| <p><b>実習で得た収穫は何か。(勉強したり指導を受けたりして気付いたことなど)</b></p>  | <p>授業の構成と学級運営の仕方が一番の収穫だったと思います。まず、授業の構成に関しては、子どもたちのことを考え、どうしたら理解させることができるのかを考えることがいかに大切なのかを理解できました。一回の授業はその一回しかないというのを理解したうえで授業を作っていかなければならないのだと思いました。そして、その授業をスムーズに行うためには、毎日の学級経営は欠かせないのだと思いました。学級経営のうまくいっていないクラスは授業もうまくいかないと思います。</p> <p>研究授業は、教材研究に加えて、児童の実態の把握がとても大事だと思います。短い期間で児童がどのくらいできるのかをすべて知るのには難しいですが、「これが解けたらこうしよう、解けなかったらこうしよう」といくつかパターンを持って取り組む必要があります。特に、児童が初めて学ぶ内容や活動については答えられる児童に限られたり、内容が伝わらなかつたりすることがあるので、慌てずに落ち着いて対処することが大切だと思いました。</p> <p>また、児童一人一人の個性に合わせた声掛けや指導について、担当の先生をよく観察し、自分なりに実践できたことは、今後にとって大きな経験となりました。実習前は模範的な言葉かけしかイメージできませんでしたが、実際に児童と向き合ってみると、その子に合わせた声掛けについて考えながら実践することができるので、よかった点や改善点が見つかることができました。</p> <p>授業に関しては、まず時間内に今日の内容を終わらせることを強く言われました。そして、ただ終わらせるだけでなく、算数だったら練習問題や計算ドリルをして今日やった内容を定着させることを含める必要があります。また、必ず「めあて」と「まとめ」を立て、関連させるようにしました。</p> <p>指導案に関しては、教材観のところは学習指導要領を確認してから書くようにすること、指導過程を書くときは、段落や数字の字体を揃えるようにすることなどを学びました。</p> <p>担任の先生は、算数の少人数に分ける時、学力別に分けるのではなく、出席番号順で分けておられました。先生から、学力別に分けるのが一般的だが、この学年は少人数で学習することを一番の目的にしているからであり、また、学力の高い人の発表を聞いて学ぶ子もいるからと教えていただきました。少人数制は様々なやり方があることが分かりました。</p> |

## 小幼コース

実習で一番悩んだり苦しんだりしたことは何か。どのように克服したか。

実習の中で一番の悩みの種となったのはやはり研究授業でした。指導案の作成や添削、準備物の制作や模擬授業等々あわせると、1回の研究授業に要する準備期間は、5日間ほどないと厳しいのではと感じました。それを1か月の実習の中で4回以上やるわけですから実習期間のほとんどは研究授業の準備期間ということになります。つまり実習期間中はずっと研究授業への不安や焦りと戦うことになるというわけです。

これを克服するのは大変ですが、大学で友達同士模擬授業を見せ合ったり、土日には気分転換して遊んだりなど、とにかく追い込みすぎないことは大事ではないかと思いました。

授業をする際には児童の実態を十分理解する必要があることを実感しました。例えば、道徳の授業でプロ野球の松井秀樹選手のことで取り上げましたが、野球のストライクやボールが分からなくて内容が分からないという児童がいました。このぐらいいは知っているだろうという感覚では駄目ということを感じました。

また、指導書に書いてある発問をそのまま使っても駄目だということを感じました。指導書にあった発問が分からないという児童がいたので、もっと簡単な言葉に直すことも必要であると学びました。

一番苦しんだことは、授業での予想外の事態が起きたときの対応でした。指導案を作る中でいくら予想していても、想定外のことが起きます。そのときに、臨機応援に対応できる力が私にはなく最初の研究授業では大変苦しみました。しかし、先生方の指導や研究授業を重ねていく中で、少しずつですが対応能力を付けることができていきました。指導案にとらわれすぎないで授業中に多少の変更ができることが、大切だと思いません。

今後の課題や抱負は何か。

今回の教育実習は、先生方や児童に教えられながら共に学んでいける貴重な経験でした。緊張や不安もあり、4週間の実習を乗り越えることができるのかと思っていましたが、先生方の的確なご指導や温かいお言葉をたくさん受けながら、実習を行うことができました。今後の課題としては、各教科の知識・理解を深めていながら、自分が教師になったときにいかに分かりやすく児童に学ばせるか、どのようにして児童が日常生活に繋げていくようにしていけば良いのかを考えていくことです。また、児童の発達段階を理解するとともに一人一人の個性をさらに伸ばしていくためには、どのようなことを心がけ、言動に移していくべきなのかをもう一度見直していきたいです。

私の今後の課題は、今回学んだことを活かせるように、まずは採用試験に向けて勉強を頑張ることです。また私自身、教員は人として厚みのある人でありたいと考えています。児童に勉強だけではなく、たくさんのことを伝えられるように、大学生のうちにさまざまな経験を積んでいきたいです。

教育実習に行って1か月の間で子どもたちの小さな成長を実感し、私は将来担任をもって1年間を通して子どもたちの成長を見届けたいなと強く思いました。そして、担当していただいた先生のような教師になりたい、受けもたせてもらったクラスのような子どもたちを受けもちたいと心から強く思いました。今後は、教員採用試験に向けて教育実習で学んだことを生かしつつ、自分は勉強不足だと実感したので指導する立場の人間にふさわしい知識を身に付けたいです。指導技術は、後からついてくるもの、今は気持ちをしっかり持つことが大切だと教わりました。心折れる時も、初めてもたせてもらったクラスの子たちを思い出しながら、いつか教師という立場であの子たちに会えることを目標に頑張っていきたいです。

## 幼保コース

実習が終了して強心に残っていることは何か。(満足感、達成感などを含む)

1週目から朝の会や昼食の部分保育をさせていただき、また3週目では1日保育、4週目では研究保育をさせていただきました。絶対に1日も休まずに実習を終えようと心に決めていたので、1日も休まずにやり遂げることができたので達成感があります。

ピアノが苦手だったので事前に毎日どんな曲を弾いているのかを聞き、楽譜をもらって弾けるように練習しました。子どもたちの前でうまく弾けるか不安でしたが、なんとか弾きながら歌えたので事前に聞いて練習をしておいて良かったと思いました。

部分保育や研究保育について観察することと、実際にやってみるとでは全く違うと思いました。実践してみたことで、指導案に書いていなかった重要な配慮に気付くことができたり、どの部分に注意しなければならないのか気付くことができました。

緊張や不安は子どもたちに伝染し、保育者が楽しんでいないと子どもたちも楽しめないのだと思いました。まず保育者自身が楽しくできるような教材研究や事前準備が必要であると感じました。

実習では、4週間という期間で多くの子どもと深く関わることができました。一人一人の性格を考慮した上で声を掛けたりすることもできたかなと思います。

研究保育で行ったけずり絵を、「楽しかったから家でもやってみたよ!」と言って家で描いてきた絵を見せてくれたときは、とてもうれしく心に残っています。

実習で得た収穫は何か。(勉強したり指導を受けたりして気付いたことなど)

研究保育や一日保育をさせていただいた時に、全体の流れや活動時間を意識しすぎて、一人一人の様子を見ることができず、全体を見ることと一人一人を見ることが同時に行うことの難しさを感じました。しかし、難しいからこそ重要なことであると思いました。

子どもたちの前で話すときには、声の大きさやトーン変えて話すことで、子どもが注意を向けたり興味をもって聞いてくれたりすることを学びました。

子どもは認められたり褒められることで、自信を持ったり、次の活動の意欲を高めるきっかけにもなったりするので子どもを認め褒めていくことはとても大切だと学びました。

毎日の保育は1回きりで終わるのでなく繋がりをもって行っていることが観察していてよく分かりました。

私は泣いている子どもやなかなか集団の中に入っていけない子がいると、気になって声を掛けることが多くあったのですが、様子を見つつ見守ることも大切だということを知りました。

子どもが自分の気持ちを言えるように、また、相手の気持ちを考えられるように子どもの気持ちに寄り添いながら声掛けをしたり、教師がモデルになることで、出来なかった玩具譲り合いができるようになったり、感謝の気持ちが言えるようになったりしました。

また、子どもが好きなもの(キャラクターなど)や子どもがイメージしやすい言葉をかけました。静かに移動する時に「忍者さんにへ～んしん」など)を使いながら声もかけることで進んで活動できるようになりました。

## 幼保コース

実習で一番悩んだり苦しんだりしたことは何か。どのように克服したか。

保育者の配慮を書く部分で、どういうことを、どういう視点で書くべきか悩みました。添削していただいた日誌等を見直したり、参考資料等を活用したりして、少しずつ書けるようになりました。

研究保育について反省点もありますが、日々の日誌や部分保育の指導案を書いていると、研究保育にまで手が回らず準備不足になってしまいました。先生方もお忙しく、すぐに添削が返却されるわけではないため、実習が始まる前にある程度どのようなことをやりたいか考えておくともう少し余裕を持って取り組めたと思います。

保育日誌の配慮の部分での表現の仕方が難しかったり、配慮に気付かなかつたりした時に、保育所保育指針や幼稚園教育要領の解説を活用することで日誌を書くだけでなく、また新しい目標を立てることができました。

一番悩んだのはピアノです。朝の会で歌を歌うのに毎日同じ歌だと飽きてしまうので違う歌を歌わせたいと思っても、初見だとすぐ弾けません。そこで、子ども達が降園した後に先生にピアノを教えていただきました。男女別に歌うようにし、どっちが踊りながら上手に歌えるかなど楽しく競争するようにしました。

今後の課題や抱負は何か。

発達障害の子がおり、学校で勉強し理解していたつもりでしたが、いざ目の前にするとどうしたらよいか分からないときが多々あったので、もっと理解を深めてどのように援助していけばよいかを勉強していきたいと思いました。

実習中に子どもたちが怪我をすることが多く、怪我をするたびにどのように対応したらよいか分からず、鼻血が出たときはどうするのか、頭を打った時はどうするのかなど怪我に応じた対応の仕方を勉強し、今後そのような場面に遭遇した時にすぐに対応できるようにしたいと思いました。

今後の課題は、製作や体を使ったゲーム、手遊びなどのレパートリーを増やすことです。また、子どもの健康・保健に関する知識を増やすことです。そして、(身体計測の方法・嘔吐の処理など) 子どもたちに人気のキャラクター・アニメ・おもちゃなどを把握することです。

花や虫、動物・宇宙など幅広い知識を身に付けることや季節ごとの曲をたくさん弾けるようにしておくこと。体調管理に気をつけることや(早寝、早起き、朝ごはん) 普段からの言葉づかいに気をつけたいです。





# 中学・高等学校での教育実習が行われました

国際教養学部4年生の中学・高等学校での教育実習が、平成29年5月8日（月）から6月23日（金）までのうち、3週間にわたって行われました。中学校で3人、高等学校で7人の学生が教育実習を行いました。いずれも貴重な経験を通して多くのことを学びました。

その中から、竹島瑛帆さんの教育実習後の感想を紹介します。

## 教育実習を終えて

国際教養学部4年 竹島瑛帆



国際教養学部4年生が臨んだ 中学校教育実習の様子

3週間の教育実習を通して、私は「社会人としての自覚」「授業の作り方」「教師としての喜び」以上3点を学びました。

教育実習とは、一種のインターンのように考える学生も多いかもしれませんが、生徒にとって実習生といえども一人の教師であり、礼儀作法から立ち振る舞いなど教育実習中では社会人として意識しなければならない場面が多くありました。そんなときに、学生として甘えていた自分を改めて見つめなおすことができ、他の先生方、実習生から当たり前だと思っていたにも関わらず、ご指摘を受けたあいさつや時間厳守などを含めたくさんのことを学び、自分を律するよい機会になりました。

又、教育実習中に主に学ぶべき授業の作り方に關しても、実際に現場での実習を通して、座学だけでは学ぶことのできない実践を踏まえ、他者から学ぶ姿勢を大切にしながら、多くの先生方や実習生からお勉強をさせていただきました。

先生方は、日々の業務に加えとても丁寧に授業研究を行っておられ、モデルとしたい教師像をたくさん見ることができました。

最後に、今回の経験を通して私が一生大切にしていきたいと感じた思いは、教育実習を行う前ではまったく予想もできなかった教師としてのやりがいです。当初はなかなか自主的に生徒に声をかけることができず、担当の先生からも心配をされていた私ですが、生徒を中心において、よい授業を求めれば求めるほど生徒がついてきてくれるようになりました。いつのまにか、私自身も生徒に愛着が湧いており、まだまだ生徒と共に成長していきたいと思っておりました。私が授業で失敗した際には、普段発表もしないような生徒が大きな声で発表して助けてくれたり、落ち込んだときには、放課後何人も声をかけてくれたりしたこともありました。私はあの日々の生徒のキラキラしている笑顔を一生忘れることはないと思います。このように、刺激的な毎日を過ごすことができ、人の人生に関わることができる教師という職業は、やりがいのある仕事だということを確認することができました。

これから、教育実習へ行く後輩の方々へ一言だけ伝えたとすれば、必ずよい経験になると思うので、一生懸命楽しんできてくださいと伝えたいと思います。